

令和4年度「生涯を通じた障がい者の学び支援事業」に係る
第4回地域連携コンソーシアム会議

令和5年2月22日(水) 13:30~16:10

県庁新館B22会議室

次 第

(受付 13:15～13:30)

1 開会行事 (13:30～13:40)

- ①開会の言葉
- ②主催者挨拶(社会教育課長)

2 協 議 (13:40～15:55)

<全体会>13:40～14:30

- (1) 令和4年度 事業報告
- (2) 令和5年度事業計画(案)

(休憩)

<グループ協議>14:45～15:40

「大分の“障がい者の生涯学習”を持続可能な取り組みにするために必要なこと」

※3グループに分かれて協議

<全体会>15:40～15:55

各グループ協議内容報告

3 閉会行事 (15:55～16:10)

- ①閉会の言葉
- ②諸連絡(事務局)

参加者名簿

【コンソーシアム委員】 ※敬称略

No	業態別	所 属	職 名	氏 名	グループ
1	学 校	国立大学法人大分大学教育マネジメント機構基盤教育センター	教授	岡田 正彦	②
2		国立大学法人大分大学教育学部	教授	衛藤 裕司	①
3		大分県立大分支援学校	校長	清末 直樹	①
4		大分大学教育学部附属特別支援学校	校長	後藤みゆき	欠席
5	社 会 福 祉 関 係 団 体	社会福祉法人大分県社会福祉協議会 あすぴあおおいた	所長	加藤 寿代	②
6		大分県障害者社会参加推進センター	事務局長	高窪 修	①
7		社会福祉法人太陽の家 大分広域本部 健康支援課	課長	池部 純政	②
8	芸 術 文 化・ ス ポ ー ツ 団 体	おおいた障がい者芸術文化支援センター	センター長	横山 勝也	①
9		大分県障がい者スポーツ協会	事務局次長	関 隆晴 (大畑有輝)	③
10		ヨカたの	代表	松尾 卓也	③
11		レッツダンスでガッツ元気の会	主宰	麻生 和江	②
12	当 事 者 団 体	公益社団法人 大分県手をつなぐ育成会	会員	藤近さと子	③
13		NPO 法人 自立支援センターおおいた	ジェネラルマネージャー	押切 真人	欠席
14			相談支援専門員	五反田法行	③
15		公益社団法人 大分県精神保健福祉会	会長	神田 弘法	③
16	企 業 関 係 者	ソニー・太陽株式会社 人事総務部広報・CSR 室	室長	佐藤 祐親	②
17	行 政 関 係 者	大分市教育委員会社会教育課	指導主事	工藤 幸子	③
18		別府市教育委員会社会教育課	社会教育主事	永尾 美保	①
19		県福祉保健部障害者社会参加推進室	主幹（総括）	関 隆晴 (大畑有輝)	③
20		県教育庁特別支援教育課指導班	指導主事兼課長補佐 (総括)	岡本 崇	②
21		県教育庁社会教育課	課長	森山 貴仁	①

【事務局】 県教育庁

22	県教育庁	社会教育課	主任社会教育主事兼課長補佐（総括）	馬場 尚登	①
23		社会教育課	指導主事	栗本 寛	
24		社会教育課	主任社会教育主事	首藤亜希子	
25		社会教育課	社会教育主事	太郎良将彦	③
26		香々地青少年の家	指導主事	小俣恵庸	②

**令和４年度「生涯を通じた障がい者の学び支援事業」に係る
地域連携コンソーシアム設置要綱**

令和４年５月２３日
大分県教育庁社会教育課長決定

（目的）

第１条 学校卒業後における障がい者の学びに対する支援の充実のため、関係者が連携し、本県の実態に応じた展開方策等について協議する組織として「地域連携コンソーシアム」（以下、「コンソーシアム」という）を設置する。

（所掌事務）

第２条 コンソーシアムは、以下の内容について協議・情報共有を行うものとする。

- （１） 本県の実態に応じた事業の方向性と展開方策に関すること
- （２） ニーズに応じた学習・体験プログラムや講座等の実践や開発に関すること
- （３） 学びを支援する人材の育成や障がい理解の促進方策に関すること
- （４） 本事業に係る情報の収集や提供に関すること
- （５） その他、本事業の推進に関すること

（委員）

第３条 コンソーシアムは、教育、福祉、労働等に関する機関・団体の代表者や有識者等、別表の委員をもって構成する。

２ コンソーシアムの委員の任期は、委嘱した日から当該年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

３ 委員は、大分県教育委員会教育長が委嘱または委任する。

（組織）

第４条 コンソーシアムに、座長、副座長を置く。

２ 座長は、コンソーシアムを代表し会務を総括するとともに、コンソーシアムの議長となる。

３ 副座長は、座長を補佐し、座長に事故があるとき又は座長が欠けたときはその職務を代理する。

４ 座長、副座長は委員の互選により選出する。

（会議）

第５条 コンソーシアムは、大分県教育委員会教育長が招集して運営する。

２ コンソーシアムは、必要に応じて委員以外の者に関係者等の出席を求め、その説明または意見を聴くことができる。

（実施期間）

第６条 令和４年５月２３日から令和５年３月３１日までとする。

（事務局）

第７条 事務局を教育庁社会教育課に置き、コンソーシアムに関する庶務を行う。

（その他）

第８条 この要綱に定めるもののほか、コンソーシアムに関し必要な事項は別に定める。

附則 この要綱は、令和４年５月２３日から施行する。

大分県教育委員会

事業名

生涯を通じた障がい者の学び支援事業

事業の趣旨・目的

共生社会の実現に向けた、障がい者の生涯学習環境整備を支援するために以下の取組を実施する。

- ・学校卒業後の学びに関する実態やニーズを把握し、「学びの場」づくりに生かす
- ・大学や社会教育関係施設（青少年の家、公民館）で講座を開設する
- ・専用サイトやリーフレットの制作により、情報にアクセスしやすい仕組みをつくる

事業実施体制・連携先

※コーディネーターは大分県教育庁社会教育課

- ・大分大学 ・大分県立大分支援学校 ・大分大学教育学部附属特別支援学校
- ・大分県社会福祉協議会 ・大分県障害者社会参加推進センター
- ・社会福祉法人「太陽の家」・芸術文化・スポーツ団体 ・当事者団体
- ・企業 ・行政（大分市・別府市教委、県特別支援教育課、県障害者社会参加推進室）

事業内容

I 地域連携コンソーシアム会議の実施

関係機関のネットワーク化による障がい者の学びに関する情報・課題の共有

II 調査研究

学校卒業後の学びの実態やニーズに関して調査し、分析結果を各取組に反映
9月 調査実施（①当事者②支援者③生涯学習担当課④社会教育関係施設）11月結果報告

III 実践研究

- ①大分大学による公開講座（知的障がい者対象）実施
- ②社会教育関係施設での障がい者向け講座の実施
- ③特別支援学校における生徒および保護者に対する啓発・体験活動の実施

IV 普及啓発

- ①公民館職員を対象とした研修の実施
- ②「ともに学び、生きる共生社会コンファレンス～おおいたでかたろうえ！～」（R5/2/4）開催による、情報共有と成果普及
- ③障がい者の生涯学習に関する情報発信

今年度の取組状況

I 地域連携コンソーシアム会議

①6/28 ②11/16 ③2/4（コンファレンスと兼ねる）④2/22
○情報交換・課題共有 ○事業内容説明・報告 ○協議「持続可能な取組にするために」

II 調査研究

回答数1,080件（回収率71%）
【分析】「スポーツ活動」「余暇活動」のほか、「個人および社会生活に必要なスキル（金融教育、ITモラル、料理など）」のニーズが高い。
・大分市、別府市以外の地域では「特に何も活動していない」の割合が高い。

III 実践研究

- ①大分大学生涯学習 6回実施 受講者4名 学生ボランティア延べ37名 メンター2名参加
- ②香々地・九重青少年の家ワンデイキャンプ4回実施 139名参加（障がい当事者111名）

IV 普及啓発

- ①第1回公民館テーマ別研修 7/16秋田県能代市中央公民館より講師招へい
第2回公民館テーマ別研修 9/16兵庫県朝来市より講師招へい（オンライン）
- ②九州・沖縄ブロックコンファレンス（R5/2/4）
- ③情報サイト「かたろうえ大分」、リーフレット作成 ④特別支援学校出前講座3回



第1回コンソーシアムの様子



大分大学生涯学習講座



かかちワンデイキャンプ（工作）

その他研究の詳細など

障がい者の生涯学習に関する情報サイト「かたろうえ大分」参照
<https://kataroue-oita.jp>



大分県生涯学習情報システム「まなびの広場おおいた」：<https://www.manabi-iota.jp>
大分県教育庁社会教育課HP：<https://www.pref.iota.jp/site/syakaikyoku>

実施スケジュール

月	地域連携コンソーシアム会議	実 施 項 目								
		調 査 研 究	実 践 研 究				普 及 啓 発			
			大分大学	青少年の家	県立図書館	モデル公民館	コンファレンス	ホームページ	リーフレット	特別支援学校講座
6月	第1回コンソーシアム		講座案立案	相談支援専門員等関係機関との協議、実施案作成		再委託契約締結				
7月	(以下随時委員に相談)	アンケート項目作成、入札			公民館テーマ別研修①			内容検討		
8月			(受講生募集)		ホームページ案作成		内容検討 講師依頼	作成・情報収集		
9月		アンケート実施、回収			公民館テーマ別研修②,HP公開	講座実施		公開		
10月		分析		ワンデイキャンプ(4回)				(以下随時更新)		
11月	第2回コンソーシアム	報告(コンファレンス)	実施(5回)	↓						
12月			↓							
1月						↓				
2月	第4回コンソーシアム		追加講座				コンファレンス(第3回コンソを兼ねる)	↓	情報収集・作成 発行	↓ 実施(3校)

I コンソーシアム

No	業 態 別	所 属	職 名	氏 名
1	学 校	国立大学法人大分大学教育マネジメント機構 基盤教育センター	教授	岡田 正彦
2		国立大学法人大分大学教育学部	教授	衛藤 裕司
3		大分県立大分支援学校	校長	清末 直樹
4		大分大学教育学部附属特別支援学校	校長	後藤みゆき
5	社会福祉関 係団体	社会福祉法人大分県社会福祉協議会 あすぴあおおいた	所長	加藤 寿代
6		大分県障害者社会参加推進センター	事務局長	高窪 修
7		社会福祉法人太陽の家 大分広域本部 健康支援課	課長	池部 純政
8	芸術文化・ スポーツ団 体	おおいた障がい者芸術文化支援センター	センター長	横山 勝也
9		大分県障がい者スポーツ協会	事務局次長	関 隆晴
10		ヨカたの(大分市立南大分中学校教諭)	代表	松尾 卓也
11		レッツダンスでガッツ元気の会(大分大学名誉教授)	主宰	麻生 和江
12	当事者団体	公益社団法人大分県手をつなぐ育成会	会員	藤近さと子
13		NPO法人自立支援センターおおいた	シニア・ネラルマネージャー	押切 真人
14			相談支援専門員	五反田法行
15		公益社団法人大分県精神保健福祉会	会長	神田 弘法
16	企業関係者	ソニー・太陽株式会社 人事総務部広報・CSR室	室長	佐藤 祐親
17	行政関係者	大分市教育委員会社会教育課	指導主事	工藤 幸子
18		別府市教育委員会社会教育課	社会教育主事	永尾 美保
19		大分県福祉保健部障害者社会参加推進室 地域生活支援・芸術文化スポーツ推進班	主幹(総括)	関 隆晴
20		大分県教育庁特別支援教育課指導班	指導主事兼課 長補佐(総括)	岡本 崇
21		大分県教育庁社会教育課	課長	森山 貴仁

協議

<テーマ>

- ・「県下で取組を普及させるための
方策について」
- ・「調査結果を踏まえた
講座・プログラムの開発について」
- ・「ボランティア・支援者の育成について」

→議事録はHP「かたろうえ大分」に掲載

第1回コンソーシアム(6/28)の様子



第2回コンソーシアム(11/16)では分科会に分かれて協議しました。



Ⅱ 調査研究

令和4年9月実施 回答数1,080件(回収率71%)

【対象】 ①特別支援学校高等部3年生、保護者、教職員 ②公立社会教育関係施設

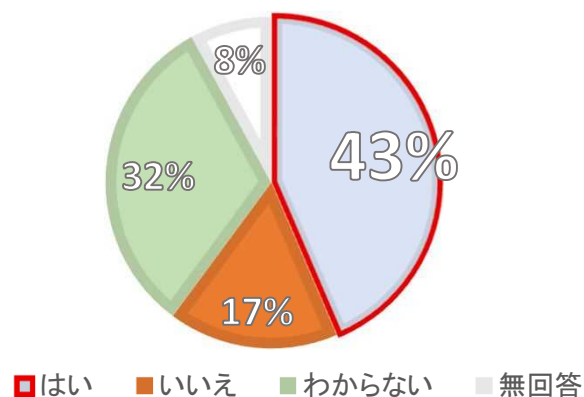
③市町村の生涯学習担当課

④障がい者就労支援施設

【内容】 学校以外の学びについての実態やニーズ(取り組みたいこと)、学びをするうえで必要なもの

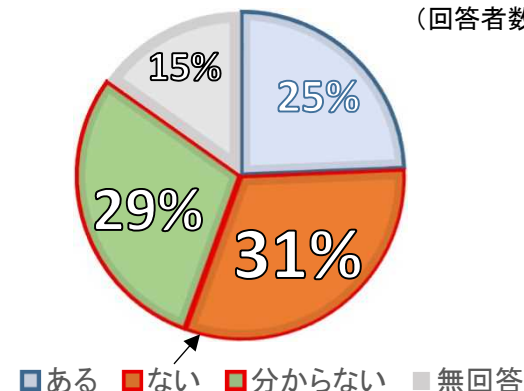
＜当事者アンケートより抜粋＞※ページは「報告書」のもの

問：学校卒業後も何らかの学びを続けたいと思っていますか。(P28) (回答者数：10代～30代の障がいのある方243名)



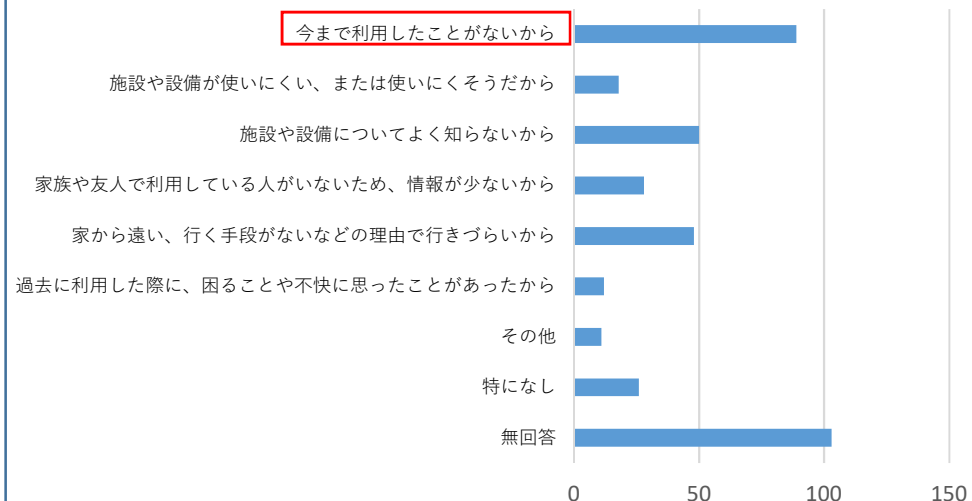
問：地域の中で、学校や職場、病院などの医療・福祉関係施設以外に気軽に出かけていける場所がありますか。(P66)

(回答者数：567名)



学びたい場所として、「図書館」「公民館」などを選ばなかった理由

(回答数：284) (P83)



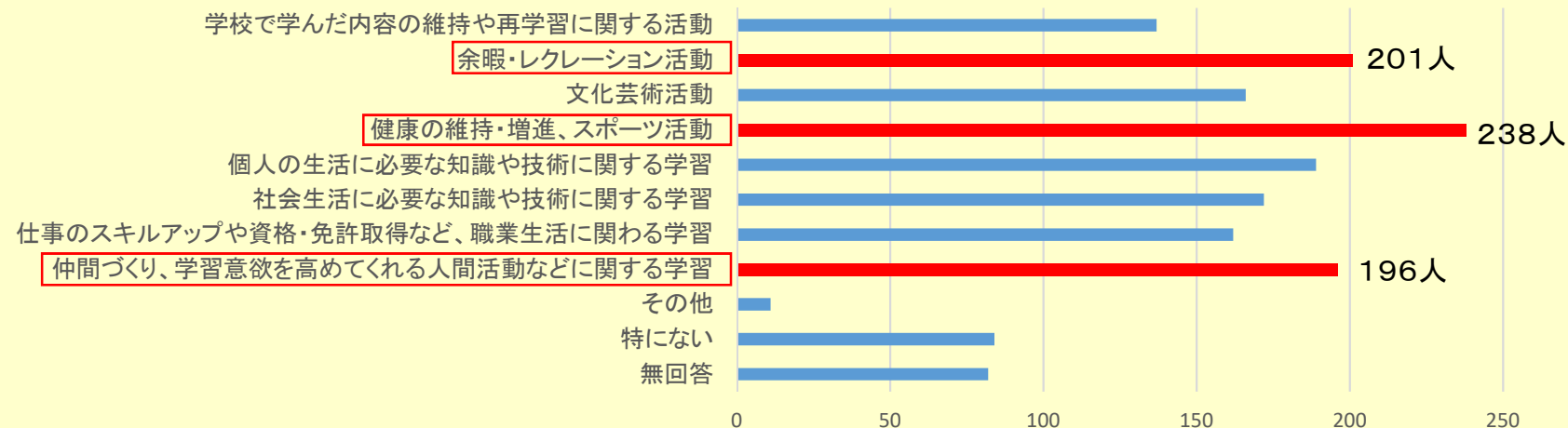
【学習活動への参加をしなくてもできない理由】(P11)

- ◆人前に出ることが辛い、緊張する
- ◆交通手段がないため、費用が負担となる
- ◆学習機会もないし、移動手段もない
- ◆障がい者の学びの機会・会場が少ない
- ◆体調不良や精神での不安
- ◆(コロナが理由)グループホームにいたのでルールがきびしく、外出がむずかしい
- ◆読んだり書いたりすることが出来ない
- ◆皆とあった時にどう反応するのか分からない、僕が来た瞬間嫌がってしまう
- ◆仕事をしている為、時間がない(施設就労)
- ◆親の理解を得られない可能性がある、行動できる範囲にそのような場所がない
- ◆同年代の人がいなく、疎外感を覚えるため
- ◆設備のバリア(会場に段差がある)や会場までのアクセス(送迎が無いといけな)
- ◆場所が遠くて行けない

＜当事者、家族・職員・支援者アンケートより抜粋＞

問：今後してみたいと思う学びはどれですか。(P69)

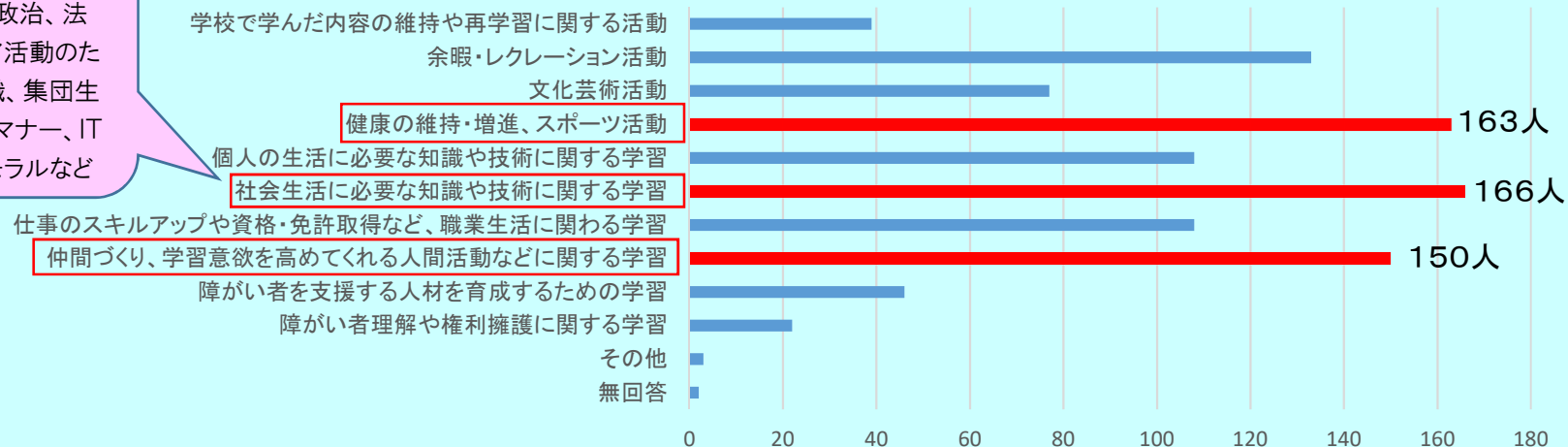
障がいのある方(回答数：567名 複数回答可)



問：どのような生涯学習活動があるとよいと思いますか。(P102)

家族・職員・支援者(回答者数：338名 複数回答可)

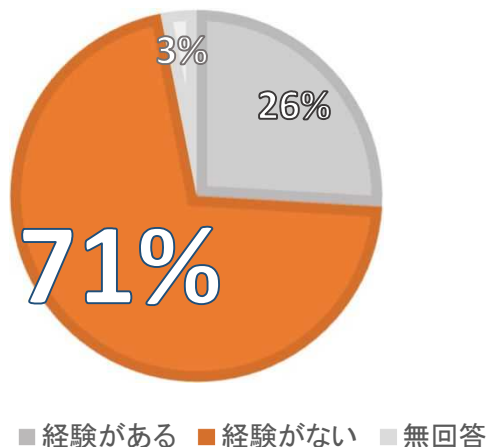
金銭の管理、資格や免許に関すること、政治、法律、ボランティア活動のために必要な知識、集団生活でのルール、マナー、ITスキル、情報モラルなど



<社会教育関係施設(公民館、図書館、美術館等)対象アンケートより>

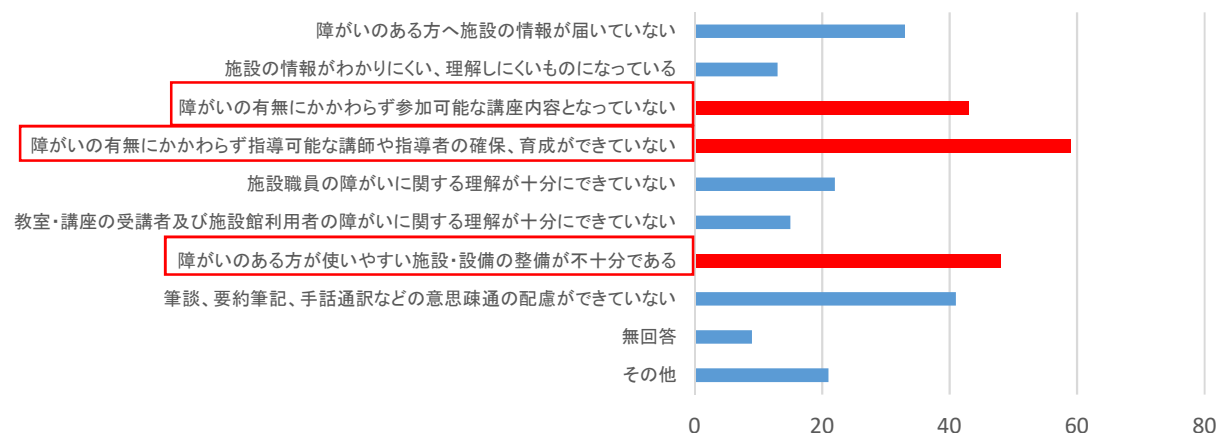
問:「障がい者の学び支援」に関わった経験がありますか。

(回答数:162) (P134)



問:「経験がない」の理由として考えられるものは何ですか。

(回答数:162 複数回答可) (P144)



<今後、障がい者の生涯学習を推進するために必要とされていること>

- ・ニーズの把握
- ・入念な計画・準備(どのような配慮が必要なのか、等)
- ・講師・支援者の確保
- ・設備等ハード面の整備(合理的配慮)
- ・具体的な事例提示
- ・特別支援学校、福祉関係者・団体との連携
- ・研修の充実(障がい、障がい者理解)
- ・障がいの有無にかかわらず参加(交流)できる教室、講座の構築

Ⅲ実践研究 大学や社会教育施設でのプログラム開発

①大分大学 生涯学習講座

受講者: 知的障がい者4名(公募)

内容: ダンス・太極拳+座学(ワークショップ)

①11/12 ②11/26 ③12/3 ④12/10 ⑤12/24(追加)2/23

受講者1名あたり学生ボランティア2名体制で支援。

特別支援学校教員2人がメンターとして全体を支援



学生と話し合い



話し合った結果を一緒に発表



太極拳体験

<受講者の感想>

- ・新しい自分を発見することができて、とても自分のための勉強になった。(20代女性)
- ・話し合う人と出会えて良かった。(20代男性)

<ボランティア学生の感想>

- ・個別的な対応の在り方やその重要性を感じた。
- ・仕事に対して意欲的で前向きな受講者の方の姿勢は尊敬できると感じました。

<総括・振り返り>(大分大学)

- ・大学講座としての特質を考えると、まず楽しみつつ学ぶというところからスタートして、より高度で専門的な内容についても提供を試み、講座受講がボランティアや就職・転職など社会参加の促進や成果活用につながる講座を検討していきたい
- ・太極拳とダンスで受講者のニーズと重なっていたか？
→来年度は把握したニーズを反映させて検討したい

②県立香々地・九重青少年の家ワンデイキャンプ(全4回)

参加者: 計139名(うち障がい当事者111名 施設職員28名)

内容: 創作活動、プラネタリウム鑑賞、軽スポーツ

<総括・振り返り>

- ・事業所職員の方々のフォローに助けられることが多かった
→一般利用に向けてボランティア等支援者の育成
- ・移動経路や活動場所の工夫が必要
→移動に時間がかかる利用者を想定。トイレに行きやすい場所の設定
- ・送迎の問題

③豊後大野市千歳公民館 「ひょうたんカレッジ」(全5回)

	テーマ	時期	内容
1	相互理解講座	10月4日	協力者対象の講座
2	アイスブレイク	10月25日	卓球バレー・ボッチャ教室
3	生活課題と癒し	11月29日	①お金についての学び ②癒しの音楽鑑賞と体験(琴)
4	工作・おやつづくり	12月20日	①折り紙教室(門松作り) ③じりやきを応用したクレープ作り
5	新しい学び	1月23日	①スマホ教室 ②防災教育、ドローン・VR体験

<総括・振り返り>

- ・地元人材の活用ができた。
- ・時間的ゆとりを確保する必要
- ・作業所の方の協力・支援



VR体験

Ⅳ普及啓発

【研修】

公民館職員研修

①7/14 講義「秋田県の障害者の生涯学習支援モデル事業」
＜秋田県能代市中央公民館＞ 参加者87名

②9/16 体験「ボッチャ、フライングディスク、卓球バレー」
体験講座：大分県身体障害者福祉センター（あすぴあ）支援
講義「公民館が行う知的障がい者支援」＜兵庫県朝来市＞
参加者31名



【広報】

障がい者の生涯学習専用WEBサイト「[かたろうえ大分](#)」開設

更新回数:63 閲覧回数 1761 (2/22現在)



【啓発】

・特別支援学校高等部3年生および保護者対象の講座「卒業後にやりたいことを考えてみよう！」を3校で実施



R5/2/13 南石垣支援学校（別府市）13:20～14:40 生徒10名

説明（10分）、その後5名ずつ2グループに分かれて「フライングディスク」と「絵手紙講座」

2/17 大分支援学校（大分市）9:05～9:25 生徒23名＋保護者3名
説明（20分）

2/22 大分大学教育学部附属特別支援学校（大分市）生徒8名＋保護者8名
説明（10分）、卓球バレー教室（30分）

卒業後の余暇活動に関しては、生徒や保護者にとって大きな課題です。
特に一般就労する生徒は狭い人間関係で過ごさざるを得ない、という話をよく聞きます。
そういう意味でも「かたろうえ大分」の意義を感じます!!
（南石垣支援学校の先生より）

・九州・沖縄ブロックコンファレンス(2/4 別府市市民会館)報告

日程	
12:50	開会行事 「ヨカたの」(令和2年度 文部科学大臣表彰受賞団体)による演奏 主催者挨拶
13:05	施策説明 文部科学省、大分県教育庁社会教育課
13:25	発表 1.「青少年教育施設での学び」 ◆小俣 恵庸(大分県立香々地青少年の家指導主事) 2.「公民館におけるプログラムの開発」 ◆野中 浩一(一般社団法人ここからプラス代表理事(豊後大野市)) 3.「ボランティア・支援者の養成」 ◆志村 美和(NPO法人春日井子どもサポートKIDS COLOR理事長(愛知県))
14:25	<休憩> (動画)「レッツダンスでガッツ元気会」(令和4年度 文部科学大臣表彰受賞団体)
14:35	基調講演「知的障害のある人の生涯学習の在り方～大分県の実践から～」 ◆衛藤 裕司(大分大学教育学部特別支援教育講座 教授)
15:00	<休憩>
15:05	シンポジウム「学校卒業後の学びの輪を広げるために」 司 会:◆岡田 正彦(大分大学教育マネジメント機構基礎教育センター教授) シンポジスト:◆志村 美和(NPO法人春日井子どもサポートKIDS COLOR理事長(愛知県)) ◆足立 志津子(NPO法人ぶろじょくとPlus相談支援専門員(兵庫県)) ◆後藤 みゆき(大分大学教育学部附属特別支援学校校長) ◆関 隆晴(大分県障害者社会参加推進室 室長補佐(総括))
16:25	閉会行事

コンファレンスアンケート結果			
回答者数: 69名(参加者 会場73名、オンライン64名)			
所属		3. 事例発表の満足度	
教育行政関係者	23	たいへん満足	23 33.3%
福祉行政関係者	2	満足	45 65.2%
学校関係者	13	やや不満	1 1.4%
福祉団体関係者	9	不満	0 0.0%
企業関係者	3		69
障がい者団体・支援団体関係者	8		
学生	3	6. 基調講演の満足度	
その他	その他行政	たいへん満足	26 37.7%
	一般市民団体	満足	39 56.5%
	大学教員	やや不満	4 5.8%
	会社員	不満	0 0.0%
	社会教育施設職員		69
	保護者		
	社会福祉法人		
	障害者就業 生活支援センター		
	69	7. シンポジウムの満足度	
		たいへん満足	27 39.1%
		満足	39 56.5%
		やや不満	3 4.3%
		不満	0 0.0%
			69
どのように知ったか		8. 本コンファレンス全体の満足度	
案内チラシ	14 20.3%	たいへん満足	22 31.9%
職場や所属からの案内	26 37.7%	満足	46 66.7%
ホームページ	4 5.8%	やや不満	1 1.4%
知人などからの案内	15 21.7%	不満	0 0.0%
新聞	5 7.2%		69
県HPより	1 1.4%		
雑誌『社会教育』誌上	1 1.4%		
コンソーシアム関連	1 1.4%		
シンポジスト	1 1.4%		
関係機関からの紹介	1 1.4%		
	69		

事例発表をした団体への感想・メッセージ
・素晴らしい取り組みに大変励まされました。
・初めての取り組みをする上での課題などがわかりやすかった
・学生ボランティアが意外と多くあることを初めてあり参加したいと感じた。
・生涯学習の立場から参加させていただきましたが、障害者は在学中に自立した生活や就労を中心に学んで社会に出ていくことだけでなく、障害がない人と同様に豊かな生活を送るための生涯学習も必要なんだと、皆さん方のお話を聞いて教わりました。今の仕事を一歩進めたいと思いました。ありがとうございました。
・障がいのある方の利用が進むように、これから取り組みを充実させていただきたいと思います。
・それぞれの立場で語られ、アイデアをいただきました。ありがとうございました。
・自分が知らない事例について、具体的なお話をたくさんお聞きでき、大変勉強になりました。
・社会教育施設としてのかかわり方大変参考になった。
・それぞれ大変具体的でわかりやすい内容でとても参考になりました。遠くにいてもZoomでこのような研修を受けることができ大変ありがとうございました。
・香々地青少年の家から、就労支援施設のワンデーキャンプについて発表、興味深く聞いてました。自然体験は、大人になっても生涯発達に良い影響をあたえてくれるでしょうね。うちの子は今19歳ですが、発達レベルが2.3歳くらいなので、とても楽しめるなと思います。障がい者のみが参加するグループキャンプ、ぜひその活動幅を広げて下さい。これから冬が来て、コロナ感染も規制が緩和されるようなので、大分市在住ですが、参加出来ると思います。
・香々地青少年の家さん、ぜひ利用してみたいです。
・ボランティア・支援員の養成が資格に繋がる制度がほしいですね。
・事例を元に貴重なお話を拝聴させて頂きありがとうございました。
・事例を交えての説明で非常に分かりやすかった。アンケートを実施することで、よりリアルに数値が見れて今後の参考にさせていただきたい。
・もう少し詳しくききたかったです。香々地の利用は大変魅力的です。
・いろいろなケースでの取り組みを知ることができました。ありがとうございました。
・繋がる努力を行っていると思いました。
・野中理事の発表がとてもわかりやすくよかったです
・「お金」について講師を招いて実施していることは良いと思う。最後の保護者さんから「障がいの枠にとらわれない活動」という生の意見は参考になりました。
・3人の発表が、わかりやすく良かった。
・健常者の生涯学習もなかなか定着が難しいなか、どうやって障がい者の学びの場の提供と定着ができるのかは、ある一団体が考えるのではなく、大きく様々な機関が結びつかないと実現できないのかなと考えさせられました。
・香々地青少年の家様の取り組みはレクリエーションの提供としては良かったと思います。青少年の家の利用の間口が広いことが分かったのは良かったです。支援学校卒業生とその保護者での利用も可能であれば嬉しいですね。ひょうたんカレッジ様の取り組みではその後の継続性がきになりました。知的障害のある方は継続したプログラムの中で時間をかけて成長していくので。また、スポーツはレクだけにとどまらず、継続することで「ルールを守る」「順番を守る」「うまくいなくても感情を周囲にぶつけない」など人としての大切な学びが身につくと思います。NPO法人春日井子どもサポートの取り組みも3年目に入るとのことです受講者が継続して活動に参加していくことで成果が大きくなると思いました。また、障害者の保護者の参加がもっと増えると良いと思いました。彼らはある意味ベテランなので。

本コンファレンス全体を通しての感想
・私が所属する地域は、障害者の生涯学習の体制整備がまだまだですが、今後の推進に関する示唆をいただきました。ありがとうございました。
・参加させて頂きありがとうございました。
・卒業後の生活を考えたときに、このような取り組みを今後も広げていってほしいです。
・足立さんのお話がとてもわかりやすく、元気をもらえました。また、登壇者が教育関係者だけでなく、福祉行政の参加もあって良かった。
・障害のある方にとって、学校卒業後、社会に出てから学びに関する地域資源とどうつなげればいいのかを考える参考になりました。
・障害の有無関係なく一緒にどう考えていくのかというのが重要であると改めて理解し、大分での様々な取り組みについて知ることができて良かったです。
・生涯学習は、学校教育も内包するものです。児童期・青年期に生涯学習の機会に触れることができると思いますが、難しい状況がありますね。支援学校・支援学級でも学習内容が決まっているので、学校は外部とつながっていく、子供達を外へ繋げていくことができると、卒業後の学びが個々の選択肢に入っていくでしょうね。
・充実した内容でした。ヒントもたくさんありました。ありがとうございました。お世話いただいた方にはお疲れ様でした。
・オンラインでの受講は少し時間が長く感じました。
・障がいのある方の人生を豊かにすること、自分らしく生きるためににも自己実現が叶う人生を送っていただきたい。そのためには意思決定（自己実現）支援の要素の一つである意思形成支援（様々な体験）が土台の部分になると強く考えさせられました。
・タイトな日程の中で、具体的な取り組みや基調など、学びの多いものでした。これからどうするのか。生徒の生涯教育をどうするのか、自分の最近のテーマでしたので、今日はタイミングよく学習考えることができ、ありがたかったです。みながいよい人生がおくれる権利もあるし、そうありたいと思っています。
・学校教育に携わる者として、生涯学習を意識して、義務教育段階から子供達がたくさんの経験を積めることや地域とつながることなどに取り組みたいと覆います。貴重なお話を聞くことができ、大変勉強になりました。ありがとうございました。
・本県では、生涯学習分野における合理的配慮など、まだまだ取り組めておらず、本日の事例発表は参考になりました。今後に向けて、本日のコンファレンスはいききっかけになりました。
・実直な意見を聴くことができ、インクルーシブな社会づくりにとって、つながりがいかに大切で、それは築いていけるという可能性を確認できました。
・具体的な取り組み事例が大変参考になった。まずやってみる、やれることからやってみるこの大切さに気付かされた。
・平日は特別支援学校勤務、週末は父が地域の公民館長なので公民館の環境整備の手伝いをしていいます。今後の職場での授業作り、公民館の未来のあり方について考える事が多かったです。
・中身がとても濃く、閉会してから、今後に向けて頑張る意欲が湧いてきました。社会教育施設職員として背中を押されているようでした。
・壇上で発表された方々の取り組みや熱い想いを聞かせていただき、勉強になり刺激も受けました。皆様、お疲れさまでした。ありがとうございました。

本コンファレンス全体を通しての感想
・障害のある人もない人も、地域全体がコロナ感染予防により、社会参加の機会を奪われていました。小さな集団からでよいので、活動をツールのひとつとして顔を合わせ、ともに話してもに笑う。それが地域が活性化するきっかけになると思います。本日得た情報を、日々の業務に活かさせていただきます。ありがとうございました。 ・本気でこのことに取り組むべきであり、実現のためには、当然予算が必要です。大分県として、是非とも予算獲得、人材発掘、事業の展開を望みます。 ・今回、このような機会に参加出来て良かったです。うちの子は昨年度、特別支援学校を卒業したばかりで、小学部から高等部まで12年に渡り通った学校を卒業して、これからでしょうか、考えているところでした。学校卒業すると、家と作業所の往復で、学習する機会やスポーツ・芸術活動など余暇を楽しむ機会が本当になくなりますね。福祉事業所の取り組みに参加して補うのみでしたが、文部科学省や県教育委員、大学などまで一丸となり、障害者へ学びの場を提供しようと取り組まれていることを知り、ありがたく思っています。当事者である私たち保護者も、活動に賛同し協力して共生社会の実現に取り組んでいきたいと思っています。有意義な時間になり、明るい未来が見えて嬉しかったです。 ・知的障害者は、日常生活を送る上で経験することが限られています。なぜ勉強しないといけないのか、何をすればいいのか、わからない方がほとんどではないでしょうか？ ・問題を「繋ぐ」という曖昧な概念で終わってしまった。シンポジストは、具体例を挙げておりました。「繋ぐ」→知らせる→手紙・口伝え 「繋ぐ」→社会(人々・地域)を巻き込む 「繋ぐ」→障がい者同士が結束する 「繋ぐ」→障がい者差別払拭のための団結、風潮をつくる。 「繋ぐ」は現在社会に先行しているインクルージョンの完成概念というのため方法を模索、みい出すキーワードですが、少々混乱してまったように思った。 ・今回のコンファレンスは最初の一步。被差別の状況にある「障がいのある人」の生涯学習や余暇活動の選択肢が増えることに期待します。ただ、性的少数者や少数民族に対する差別発言が政権中枢(元政務官や元首相補佐官)から出てくる現状に、本当に「共生社会」を実現するつもりがあるのか、政権の人権感覚に対する危機感を持っています。 ・『共生社会を目指そう!』と言わなくても良い世の中に早くなるといいですね。障害ある者は『差別をする...』と言う発想や意識は少ない...もしくは無いと思います。『差別をする』『この人たちと私達は違う』との思いあるのは全て健常者側の考えだと思います。健常者の方々には『差別、区別をしない柔軟な考え方を』私たち障害者側は『健常者主流の社会の中に飛び込み生きていく強い勇気』が必要です。余談で申し訳ございませんが【別府市公会堂】は私が学んで、広めてきた『ユニバーサルデザイン』の考え方に大きく反した今の世の中に逆行した建物で、私は表から建物を見る度に悲しくなります。別府市公会堂の建物自体が『健常者』と『障害者』を区別した今回のテーマにも大きくかけ離れている建物だという事に気づいてください。ユニバーサルデザインの事を地域福祉推進室の方に教えてもらってみてください。 m(_ _)m原野彰子 ・今回は本コンファレンスに参加させていただきありがとうございました。障がい者の学びはいくつもの可能性があること、そして当事者だけではなく市、地域を巻き込んで直接関わる事が共生社会への一歩であると考えさせられる時間でした。障がいに関する専門知識を身につけることよりも、直接会話をしたり関わりを持つことに注力した方が良く、という点には障がい者でもあり市職員でもある私にとって納得するお言葉でした。今後もまずは「繋がり」、「関わり」ながら、障がい者の生涯学習の一助となるよう尽力してまいります。本日は準備から会場設営まで誠にありがとうございました。またこのような機会がありましたら、ぜひ参加したく存じます。よろしくお願いいたします。 ・基調講演の時間は短かったのもっとききたかったです。香々地は当法人も申し込めるようであればお願いしたいです。

本コンファレンス全体を通しての感想
・まだまだ学びやスポーツなど一般的になってないことを再認識させられました。また、一部の方の熱意だけで成り立っているの否めないと感じます。いい気付きを与えてくださりありがとうございました。 ・シンポジウムのパネラーの実践に基づくお話は大変有意義でした。進行もわかりやすく頭の整理になりました。 ・知的障害児の支援に対して、いろいろな可能性や選択肢がある話をお聞きして、今後はいろいろな機関や機会を活用して支援にあたりたいと思います。 ・様々な取り組みを行なっている事で結果が伴っていると感じた。個人的に率先して活動をする事が困難なため、風通しのよい環境になる事が先ず課題と痛感した。 ・コロナ禍が続く中、学校は誰かとつながる機会を失っています。今回のコンファレンスを通して、人とつながるためのキーワードをたくさんいただきました。子どもたちの卒業後の生活が豊かになるよう、教員として何か働きかけができればと思います。 ・最後の会場からの意見に自分の立ち位置がどうだったのかなと反省させられました。特に、公民館講座等の参加者が少ない、どうして増やすかというときに、健常者の参加しかイメージできなかった自分を多に反省しています。今回は障がいのある方という括りをしましたが、障がいのあるなしに関わらず全ての方がという公民館にしていきたいと思っています。発表した皆さん、運営に携わっていただいた皆さんに感謝です。ありがとうございました。 ・これから始まると思った感じですが、みなさんの暖かい気持ちがあふれていました ・ナカボツの業務の中で、就労と生活の支援をしていますが、休日の過ごし方を訪ねると家でゲームなど(コロナ禍でもありますが)、自宅で過ごされる方が多いように思います。一方で、ボランティア活動に参加したり趣味活動に没頭して、就労面に影響が出ている方もいらっしゃいます。程よくバランスをとることも経験を積みながら学ぶ必要があると感じています。今回は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。 ・シンポジウムでもそうでしたが同じ意見が多く感じました ・ありがとうございました。 ・オンラインでの参加でしたが、途切れることも無くスライドと発表者の方向方をキレイに見ることができ、非常に聞きやすかったです。実際に行ったことを具体的に聞くことが出来たので勉強になりました。ありがとうございました。 ・それぞれの発表やシンポジウムを通じて、障害者の生涯教育が手探りで始まったばかりだと(少なくとも大分県は)感じました。しかし、青少年の家や公民館が学びの場になりうることは大きな気づきでした。その点は大変良かったです。コンファレンスを通じて、障害者を集めて何かしら学びにつながるものを行おうとしているように感じました。それは少し残念でした。たとえば今問題になっている迷惑行為の動画投稿など義務教育段階から、障害の有無に関わらずしっかり教えておく必要があると思いました。たしか支援学校の生徒はiPadを持った時に人の写真を撮る事への注意をしっかりと受けて悪直なまでにそれを守っていた印象があります。同年代の一般の生徒と一緒に学ぶ場があればお手本になれるのではないのでしょうか？ そうした学びには寸劇の手法が有効に思えます。また、ポッチャなどの誰でも親しみやすいスポーツは、一般の老若男女と障害者が一緒に行うことで互いの学びにつながるのではないかと思います。障害者の為に一般の人が教育をしてあげるものではありません。障害者がいることで一般の人にも学びがあり、一般の人と一緒にいることで障害者も頑張れるのと思います。地元の校区青少協の活動を長らくやってきましたが、小学校の生徒を対象にしていって地域で暮らす支援学校の生徒を無意識のうちに除外していたことに気づきました。来年度に活動に、障害の有無に関係なく参加できるポッチャ体験を加えたいと思います。

令和4年度の取組についての成果と課題

<成果>

- ・障害福祉、特別支援教育、社会教育関係者の連携体制構築
- ・生涯学習に関するニーズと実態調査をはじめて実施
- ・大分大学、青少年の家、公民館での講座開設
- ・専用情報サイト「かたろうえ大分」開設

<課題>

- ・県内にどう広げていくか
- ・障がいのある方自身が情報を手に入れられるシステムづくり
→ネットと紙媒体での情報提供
- ・「かたろうえ大分」の内容充実(情報収集と発信)
- ・学校教育から生涯学習への「接続」「移行」をスムーズにする工夫
- ・ボランティア、支援者の養成
- ・講座内容の拡充(動画教材の開発等)

令和5年度 生涯を通じた障がい者の学び支援事業(案) ～共に生き、学ぶ社会の実現に向けた生涯学習支援に関する実践研究～

「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」(国庫委託10/10)

障がい者を巡る現状と課題

- 生涯学習に関するニーズや実態(学習団体や活動者数、活動内容等)を把握できていない。
- 卒業後、自立や社会参加、健康維持のための体育的・文化的・芸術的な学びを継続して行える場やプログラムが少ない。
- 障がい者が自ら生涯学習に関する情報を得ることが難しい(したいことがあっても窓口が見つけれづらい)。
- 障がい者の生涯学習に関する県民の理解や協力への意識付けが十分でない。

～共生社会の実現に向けた、障がい者の生涯学習支援～

具体的取組

I【推進協議会(コンソーシアム)の実施】(年4回)

(内容) 関係機関のネットワーク化(情報や課題を共有し、取組について協議)

(構成) 県教委、県障害福祉課、特別支援学校、大分大学、市教委、県社会福祉協議会、社会福祉法人、企業、障がい者支援団体、生涯学習関係団体

II【調査研究】

- 先進地の視察(宮崎県、東京都等)により得た成果を取組に還元
- 【新】県内の実践例や研究結果についてまとめた事例集を作成

III【実践研究】

- 大分大学による、知的障がい者を対象とした生涯学習講座の拡充(年10回)
公開講座(例)「歩きやすいまち調査」「スポーツ講座(ダンス等)」(R4実績より)
- 社会教育関連施設における学習の場や学習プログラム、居場所の提供
 - ・県立青少年の家での体験活動(自然散策、創作活動)
 - ・モデル公民館(3館)での講座(スポーツ、調理実習、スマホ教室、ドローン体験など)
- 特別支援学校での生徒・保護者に対する生涯学習についての啓発と「卒業後の学び」への誘導

IV【普及啓発】

- 講座を企画・運営する公民館・市町村職員向けの実践的な研修を実施
- 【新】ボランティア・支援者養成講座を実施
- 「県内コンファレンス(実践交流会)」を開催し、情報共有と成果普及
- 障がい者の生涯学習に関する情報発信…「かたろうえ大分」(専用ページ)の充実、リーフレット改訂
- 【新】障がい者のニーズに基づいた教材(動画コンテンツ等)の開発



卓球パレー

効果

- 障がい者の生涯にわたる学びの場の拡大・充実
- 障がい者の喜びや生きがいの創出と健康的な生活を営むために必要な力の維持・伸長
- 障がい者の学びを支援する人材の育成とシステムの構築

【大分県の障がい者の状況】

- 障がい者数(93,702人)
身体障がい者60,859人 知的障がい者10,897人
精神障がい者11,313人 難病患者 10,651人
(R3「県障がい福祉計画」「県障がい児福祉計画」より)
- 支援学校卒業予定者 198人(R4年度)
※毎年約200名が卒業
- 県障がい者スポーツ協会所属団体数 24
大分市14 別府市5 宇佐2 日出1 臼杵1 日田1 (協会HPより)

【根拠法令等】

- 障害者権利条約(H26年)
障害のある人が成人教育及び生涯学習において良質な教育を受けられる公平な機会を与えられる(第24条 教育)
- 障害者差別解消法(H28年)
全ての国民が障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資する(第1条)

【重点:1年目】R4

- ①コンソーシアム体制整備
- ②調査研究 ③HP開設
- ④実践研究の実施

【重点:2年目】R5

- ①県下への普及(研修・HPの拡充)
- ②社会教育施設での講座拡充

【重点:3年目】R6

- ①大学の公開講座の定着
- ②生涯学習に関する情報一元化
→学びへのアクセスを保障
- ③障害の有無に関わらず地域住民が共に学べる講座数増大
- ④持続的な取組体制の構築
(知識・ノウハウの蓄積
→市町村への助言・支援)

第2回コンソーシアム(11/16)＜分科会のまとめ＞

第1分科会:「県下で取組を普及させるための方策について」

- ・大前提として福祉と教育の違いを明確にしておく必要がある。福祉＝サービスの提供がメイン、教育＝活動の中に「学び」が欠かせない。普及させるという点では、重度の方よりも大分大学のような軽度の知的障がいの方から取り組み、蓄積して広げていくことが良いのではないかな。
- ・また、様々な施設に「来てもらう」だけではなく施設に「出かけていく」のが良い。ノウハウやプログラムを公民館や事業所に赴いて提供することが必要。そのためのパターンを研究していくべきだ。
- ・取組の拡散については、モデルを作って研修会や説明会で説明するパターンもあるが、Facebook を使うなどもっと柔軟なやり方があって良いのではないかな。

第2分科会:「調査結果を踏まえた講座・プログラムの開発について」

- ・単純集計だと、どんな人に何をすれば良いかがなかなか議論しづらい。クロス集計をもらってから再度話したい。
- ・利用者のニーズと保護者のニーズと社会的必要とをそれぞれ反映させて組み合わせながらどのように提供していくかを検討する必要がある。
- ・「障がいのある人の学び」を意識していたが、本人と保護者、支援者、ボランティア、運営者が考えなどを交流・協議する要素を含めたプログラムを開発し、実施していく必要があるのではないかな。「障がい者のためのプログラム」をつくる必要はなくて、多様な方が参加して、交流するプログラムをつくっていききたいというのが方向性のひとつ。またそのようなプログラムをつくる際、企業の CSR 活動の一環として、あるいはそれを支える人材を確保できるような体制作り。
- ・講師の養成に加えてコーディネートする人、つなぐ人、マネジメントができる人、というように地域で「仕組み」をつくっていくことも必要ではないかな。
- ・社会教育とは自主的なプログラムである。社会教育と福祉分野でやることをそれぞれうまく組み合わせて実施することを検討する必要がある。

第3分科会:「ボランティア・支援者の育成について」

- ・育成方法について。
 - ①「活動しながら学んでいく」、つまり実際に体験しながら学んでいくことが大事。
 - ②ある程度の知識を得て活動に入っていく
 - ・ボランティア・支援者として活動している人
 - ・地域の大学生、地域の方(イベントに集まる方、公民館の講座参加者)に声をかけて支援してもらう。また、学校の先生に参加してもらい、支援してもらうというように、色々な人に関わってもらったらかうか。
- ・課題としては、活動場所への送迎がある。気持ちはあってもそこに行くまでが大変だということで、送迎のボランティアもあると良いが、命を預かるので、ホームページでの周知やタクシーチケット、高齢者チケットのようなものを使ったり、スポンサーになってもらって出してもらったりなど活動場所と人をつなぐという課題を解決していくと良いのではないかな。
- ・最終的に育成するためには、早い段階からこういう経験を積んでおく、学校教育の中で若いときから経験を積ませるなかで「あたりまえ」になっていくのではないかな。大人になってからも新任研修の中で障がい者と出会う機会を創るなど。また、地域にいる70代の元教員などにも声をかけて支援してもらってはどうか。「若いときから経験を積む」、「年齢を重ねた力のある人に支援してもらう」というのが良いのではないかな。

<メモ>